

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	河本悠吾

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
インドネシア・北スマトラ・Batang Toru Research Center
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生スマトラオランウータンの食性に関する予備調査
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 1 月 7 日 ~ 平成 29 年 1 月 21 日 (15 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Batang Toru Research Center、ボゴール農科大学 Puji Rianti 氏、早川卓志氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
私は現在、スマトラオランウータンの味覚、主に酸味について研究している。彼らの味覚を理解するために、実際に彼らがどのような環境で生活しているのか知る必要があると感じた。今回の渡航は、その調査の準備段階として、調査環境、調査の可否の検討、今後の調査計画の明確化のためにおこなった。具体的な活動内容は、オランウータンの探索、エサとなる果実の記録と pH の測定である。
日程
01/07 関西空港→チャンギ空港 (シンガポール)
01/08 チャンギ空港 (シンガポール) →スカルノハッタ国際空港 (インドネシア・ジャワ) Ragunan Zoo 訪問
01/09 スカルノハッタ国際空港 (インドネシア・ジャワ) →シボルガ (スマトラ) 各役所にあいさつ回り
01/10 シボルガ→Batang Toru research center へ移動
01/11~01/17 調査：オランウータン探索、食物 (果実) の採取・pH 測定
01/18 Batang Toru research center →シボルガへ移動
01/19 各役所にあいさつ回り
01/20 シボルガ→スカルノハッタ国際空港 スカルノハッタ国際空港→チャンギ空港
01/21 チャンギ空港→中部国際空港
調査は毎日朝 9 時から 16 時まで行われた。オランウータンを探して歩き、彼らが採食する果実が地面に落ちていた場合、それを採集した。持ち帰った果実は、種名を記録したあと一つを残して袋に入れて砕き、pH 試験紙を用いて pH を測定した。残った一つは私自身が齧り、感じた味を記録した。今回は 6 種類ほどの果実を採集できた。私の事前の予想とは異なり、pH が低いからと言って酸っぱいわけではなく、多くの果実で苦味や渋みを感じられた。また、水分が少ないものや果汁に色がついたものが多く、正確に pH が測定できているか疑問であった。しかしながら、pH の低さは渋みの主な成分であるタンニンに関連している可能性がある。また、このような強い渋みによって、酸味などの他の味覚がマスクされていることも考えられ、今後他の味覚との相互作用なども検討していきたい。
オランウータン探索の際には、使用後のネストやしがみかすを多く発見できた。フンや尿のにおいも確認できたが、結局、今回の調査でオランウータンに会うことはできなかった。その原因として考えられることとして、我々の活動時間の短さがある。<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先： <a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

オランウータンは6時頃に起きて採食のために活動を始めるようであるが、昼前には一度落ち着いてしまう。我々の活動はその時間帯が活発であるので、オランウータンを発見するのは難しいかもしれない。また、この地域のオランウータンはあまり人付けされていないようであった。今回の滞在は短いものであったが、オランウータンを見つけるために改善できることはあると思うので、次回はそれらを考慮して臨みたい。

今回の渡航では、アジルテナガザルを少しではあるが観察できた。彼らがオランウータンが採食する果実を食べることが確認できたので、このような他種との関係性も味覚の研究につなげていければと感じた。

自分自身の研究で海外に行くのは今回が初めてであった。今回の目的の一つであるオランウータンの観察ができないなど、いくつか問題点はあったが、フィールドでの調査の難しさを体感できたことが一番の収穫であった。今回得られた課題の解決策を考えたいので、今回よりも長い期間を設けてもう一度調査に訪れたいと思う。



滞在したステーション



オランウータンのネスト



*Myristica sp.*



*Hylobates agilis*



Photo by Amiry

集合写真

### 6. その他 (特記事項など)

今回の渡航は、PWSの支援により行われました。また渡航に際し、ご指導ご協力いただきました Puji Rianti 氏、早川卓志氏、Batang Toru Research Center の皆様に感謝申し上げます。

**「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書**  
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)